

氏 名：大坂和可子
学位の種類：博士（看護学）
学位記番号：甲第 135 号
学位授与年月日：2015 年 9 月 15 日
学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当
論文審査委員：主査 林 直子（聖路加国際大学教授）
副査 中山 和弘（聖路加国際大学教授）
副査 菱沼 典子（聖路加国際大学教授）
副査 有森 直子（新潟大学）

論文題目：体験者のナラティブを活用した意思決定ガイドの効果：
早期乳がん患者の術式選択における意思決定の葛藤に関するランダム化比較試験

博士論文審査結果

乳がんの術式選択はメリットとデメリットの間で取引が必要な意思決定であり、何を大事にして決めたいかという患者の価値観による影響を受けるため、葛藤を伴いやすい。患者の意思決定への参加を促し、葛藤の軽減を図る意思決定支援は看護の重要な役割であり、欧米では治療のエビデンスと価値観の明確化を取り入れた意思決定ガイド（decision aid）の効果が実証されている。しかし、その支援において体験者のナラティブ（語り）をガイドに含めるものが多いが、その効果には議論があるところで、その効果を実証した研究は未だない。

そこで、本研究は、日本においても、乳がん患者が術式選択をする際に、意思決定ガイドが効果を持つかを検証するとともに、体験者のナラティブを含むことの効果を評価することを目的とした。

方法としては、手術を予定している早期乳がん患者で研究協力に同意の得られた 210 名を、意思決定ガイド（ナラティブあり）群、意思決定ガイド（ナラティブなし）群、対照群の 3 つにランダムに割り付けたランダム化比較試験を実施した。意思決定の葛藤の測定尺度 DCS 日本語版をプライマリーアウトカムとし、自記式質問紙調査により、介入前、介入後の術式決定後、術後 1 か月後に測定した。有効回答 174 名で ITT 解析による共分散分析と多重比較法の結果、意思決定ガイドの 2 つの群はいずれも対照群と比較して、手術後 1 か月後の葛藤を有意に減少させる効果が認められた。ナラティブ情報の有無の葛藤に対する効果では、有意な差は見られず、ほぼ同様の効果であった。

ナラティブの有無で違いが見られなかった要因としては、ナラティブ情報についてはどの選択肢に対しても偏りがないように、ポジティブな内容とネガティブな内容の両方を提供していることが考えられた。今後、手術後の生活の見通しを多様な視点から検討できるというプラスの面と、多様な価値観に触れるために一時的には情報充足感が満たされないという面の両面から検討していく必要がある。

審査では、修正点として、ナラティブに注目する理論的な背景と、それを含むことのメリットとデメリットの両面について明確に記述すること、シェアードデシジョンメイキングを含めて研究の概念枠組みと測定している変数の関係を一致させることなどが指摘された。

これらを検討した上での修正が確認され、本研究は、日本における意思決定ガイドの効果を、体験者のナラティブを含む場合と含まない場合、および対照群と比較し実証的に検討した先駆的な研究として高く評価できた。

以上により、本論文は、本学学位規程第 5 条に定める博士（看護学）の学位を授与することに値するものであり、申請者は看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査ならびに最終試験に合格と判定する。